

問1

(1)

【1】「仮説演繹法の意義と近代科学の方法論的限界」

【2】「仮説演繹法の手法と近代科学の方法論的限界」

(2) 選んだ番号【1】

本資料において筆者は、近代科学の基盤となっている仮説演繹法という方法には常に仮説に留まり続け、修正や廃棄の可能性に晒されているという限界があると結論づけている。こうした限界に言及していない【0】の要約は他の二つに比べて明確に不備がある。その点、【1】と【2】はともに仮説演繹法の限界、仮説演繹法が演繹法と帰納法それぞれの長所を活かした手法であること、仮説演繹法の具体的な過程について指摘しているが、演繹法と帰納法がそれぞれどのような方法であり、どのような長所・短所を有するかまでを具体的に述べた【1】の方が、そのような説明を省略した【2】よりも適切な要約であると判断できる。

問2

(1)

近代科学の方法論である仮説演繹法の後半部分、すなわち命題の演繹、実験、フィードバックというステップは社会問題の解決や政策決定においても基本的な方法として機能しうるが、前半部分については修正が必要となる。これは政策決定が人間を対象とするものであるために、近代科学の態度を踏襲しては問題を発見することはできないからだ。例えば何らかの社会現象が問題視されていたとしても、その現象が人々にどのような困難をもたらしているかや、人々がどのような助けを求めているかは、客観的観察のみではわからず、当事者の立場に立ってその現象を引き受けてみる必要がある。同様に解決の端緒となる仮説も、問題や困難を外側から眺めている立場ではひらめくことは少ないだろう。ゆえに当事者の声が政策決定者に届くような仕組みが社会問題の解決を導く仮説の提起においては必要になる。

(2)

児童虐待は近年注目される社会問題の一つであるが、加害者に対する人格攻撃や厳罰化を望む声ばかりで、この問題を社会が生み出す構造的な問題と捉えて解決策を見出そうとする動きは少ないように思える。そこで今回は児童虐待をテーマとし、この問題を解決するための仮説がどうすれば見出せるか、またその実現のためにどのような方法があるかについて考えていく。

まず児童虐待の問題を解決するためには、当事者に寄り添う形で、虐待に至る心理プロセスを紐解いていく作業が必要になると考える。どんな時に子どもに手を上げたか、そのスイッチはどこにあったのか、また虐待がどのようにエスカレートしていったのか、虐待の後どんな気持ちになるのかなどを、加害者を糾弾する姿勢ではなく、彼ら彼女らもまた虐待に苦しむ一人の人間であると捉え、その生の声に耳を傾ける取り組みが求められる。

それでは次にこうした取り組みを実現する方法について考えていく。加害者の声を聞き取るためには、臨床心理士のような専門家の存在が不可欠である。また個々のケースを手がかりに、虐待の心理的メカニズムを一般化するための研究も必要になる。さらにこれらの研究に基づき、虐待が疑われる家庭へのケアの方法についてガイドラインを作成し、児童相談所に通達することも欠かせない。このように臨床心理士による問題の発見、研究機関による仮説の提起とテスト命題の演繹、児童相談所による実験とフィードバックというプロセスを形成することで、問題解決の端緒が見えてくると私は考える。